



発行：真宗大谷派 常入寺
富山市東老田 787 番地
電話 (076) 436-0816
FAX (076) 436-2766
携帯 090-3764-3983
発行責任：青井和成

御文をいたただく 其の十九

五帖目第二通 ⑩

それ、八万の法蔵をしるといふとも、後世をしらざる人を愚者とす。たとひ一文不知の尼入道なりといふとも、後世をしるを智者とすといえり。しかれば、当流のころは、あながちに、もろもろの聖教をよみ、ものをしりたりといふとも、一念の信心のいわれをしらざる人は、いたずら事なりとしるべし。されば聖人の御ことばにも、「一切の男女たらん身は、弥陀の本願を信ぜずしては、ふつとたすかるといふ事あるべからず」とおおせられたり。このゆえに、いかなる女人なりといふとも、もろもろの雑行をすて、一念に、弥陀如来今度の後生たすけたまえと、ふかくたのみ申さん人は、十人も百人も、みなとも弥陀の報土に往生すべき事、さらさらうたがいあるべからざるものなり。あなかしこ、あなか

弥陀の報土

弥陀の報土というのは、お浄土とも言い浄らかなという意味です。一方私たちが生活している世界を浄土教仏教では、穢土と言いついていい世界ではないとずつといいていい世界ではないといふことは一面で言えることではないでしょう。そういう意味で言えば穢土が出发点で浄土が終着点であつたり目標地点ともいえることなのでしよう。

でもただ浄土に何も考えずに向かつていけばすむものではないような気がします。なぜ浄土に向かつていかなければいけないのかそのことを再確認し続けなければいけないような気がしてなりません。浄土はなぜ浄らかなのか、なぜ私たちの住んでいる世界を穢土、穢れた世界であると言いついてこられたのか。そのことを訪ね続けなければ浄土への近道を歩めないような気がします。

諭しくださっています。

阿弥陀如来の救いが私を浄土に生まれさせてくださるといふだけだと、信じ切れない思いが私にはわいてきます。未来のこの約束だけなら。その確信をなかなか得ることが出来ません、疑い深い私ですから。本当なんだろうかと不安がつきまといえます。やっぱりそのことを確信させてくれるものがほしいです。今阿弥陀如来を感じたいです。でも、念佛を称えてこられた先輩方は感じてこられたはずで、感謝の念佛といわれてきたわけですから、感謝するもので出会われてきたはずで、それは、浄土に生まれるしかなければ身を照らし出し続けなくてはならないか。阿弥陀如来の救いは、未来において私を浄土に生まれさせてくださるといふはたらきと、今において是我が身を照らし出し続けてくださり浄土往生しなければならぬ見という二つあるといつてもいいのではないのでしょうか。

浄土は私たちがの行き先でもありますが、もう一つ私の世界私の生活を照らし出してくださいというはたらきもありません。お浄土に生まれなければならぬ我が身であることを

ご命日の集い 三月から再開します

ご命日の集いとは私たちの宗祖、親鸞聖人のご命日である二十八日に開催する仏事です。常入寺では三月から九月の間の毎月二十八日に勤めています。何をやっているのかといえば、実は難しいことは何もありません。宗祖親鸞聖人がお造りになられた「正信偈」といううたをみんなて節を付けて読んで、後はお茶を飲んでいただけです。

それだけです。皆さんも月に一度お寺に集いお茶しませんか？
どうぞお気軽に顔をお見せ下されれば幸いです。お待ちいたしております。

毎月二十八日午後二時～三時ぐらいまで

とにかき一回来てくださるはれまっ！たのんちゃま

原子力発電に依存しない社会の実現を求める決議

2011 年 3 月 11 日に発生した東京電力福島第一原子力発電所の事故では、放射能汚染が、原子力発電所の立地地域のみならず、広大な範囲に拡散し、多くの人々が生活の基盤を奪われるという深刻な事態となっている。昨年末、政府は事故自体の収束宣言を行ったが、未だに原子炉内部の状況は不明であり、放射性物質の漏洩は食い止められず、除染の目処もつかない厳しい状況が続いている。被災された方々に、一日も早く、救援がより広く確実に展開されることを願わずにはいられない。

1979 年の米国スリーマイル島原子力発電所事故、1986 年のソ連（現：ウクライナ）チェルノブイリ原子力発電所 4 号炉で起きた原子力事故以降も、地震国日本の狭い国土に次々と原子力発電所が建設されてきた。その数は 54 基にも達することとなり、私たちは原子力発電に大きく依存する生活を営んで来た。一旦、この度のような大事故が起これば、取り返しのつかない事態となることに思いを致すことのなかった迂闊さを深く反省するものである。日本の原子力発電は技術・設備・管理ともに十分に安全であり、原子力発電がなければ電力供給に不足を来すという、いわゆる安全神話と必要神話を安易に信じ込み、エネルギーと物の大量消費を限りなく続けていくことが「豊かさ」であると私たちは思い込んで来たのである。

原子力発電所事故にたいする報道には時には正確さを欠き、公平さに難点のあるものも見受けられる。このような一方的感情的とも思われる批判は、風評被害を招き易く、当該地域の人々や原子力発電所で働く多くの人たちを傷つける恐れがある。今回の事故の対応としては、放射能測定による安全性の確認と、正確な情報提供を期待するとともに風評被害の防止に努めなければならない。

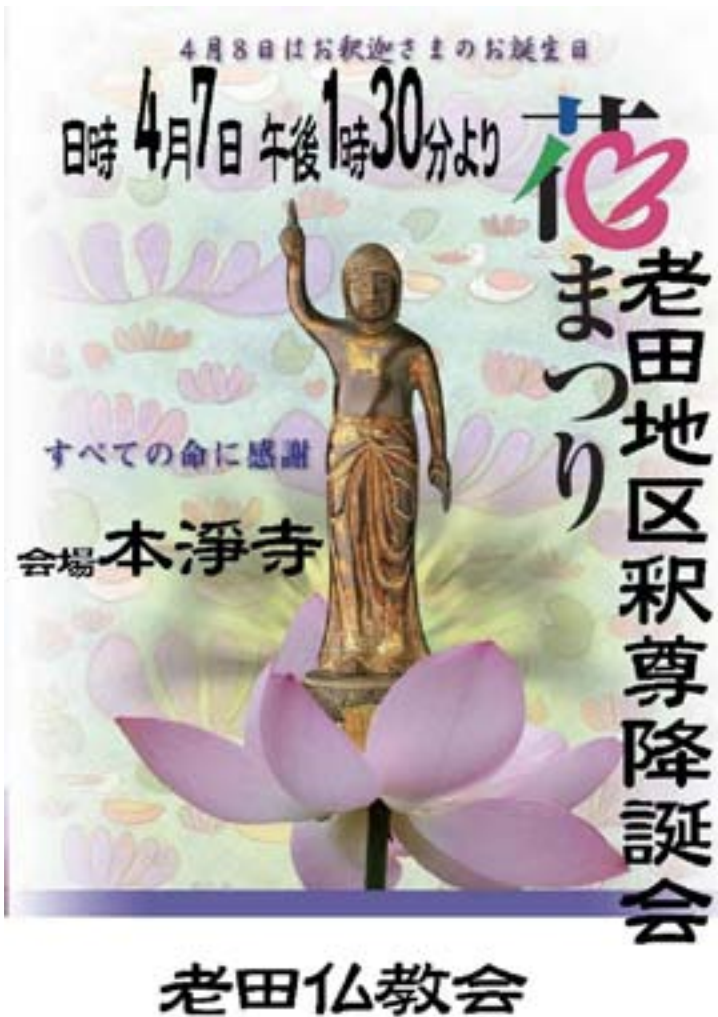
この度の事故によって、原子力発電には、現在のみならず未来のいのちをも脅かす放射線被曝被害というものが起りうることを証明することとなったのである。原子力発電に依存しない、安全安心で、持続的発展可能な社会を実現することが重要である。すべてのいのちを損ねとって捨てない仏の本願を仰いで生きんとする私たちは、仏智によって照らし出される無明の闇と事故の厳しい現実から目を逸らしてはならない。エネルギーと物の大量消費を指向する社会の在り方を見直すと同時に、原子力発電を傍観者的に受け容れてきた私たちの社会を問い返し、原子力発電に依存しない社会の実現に向け、能う限りの取り組みを進めることをここに表明する。

右、真宗大谷派参議会議員一同の名において、決議する。
以上

2012 年 2 月 28 日

真宗大谷派参議会議員一同

原子力発電所に関するものが全日本仏教会より宣言文、真宗大谷派衆議会議にて議決されました。あれから一年、これからわたしたちはどこに向かっていけばよいのでしょうか。
私たち一人一人が考えなければならない事だと思います。



宣言文 原子力発電によらない生き方を求めて

東京電力福島第一原子力発電所事故による放射性物質の拡散により、多くの人々が住み慣れた故郷を追われ、避難生活を強いられています。避難されている人々はやり場のない怒りと見通しのつかない不安の中、苦悩の日々を過ごされています。また、乳幼児や児童をもつ多くのご家族が子どもたちへの放射線による健康被害を心配し、「いのち」に対する大きな不安の中、生活を送っています。

広範囲に拡散した放射性物質が、日本だけでなく地球規模で自然環境、生態系に影響を与え、人間だけでなく様々な「いのち」を脅かす可能性は否めません。

日本は原子爆弾による世界で唯一の被爆国であります。多くの人々の「いのち」が奪われ、また、一命をとりとめられた人々は現在もなお放射線による被曝で苦しんでいます。同じ過ちを人類が再び繰り返さないために、私たち日本人はその悲惨さ、苦しみをとおして「いのち」の尊さを世界の人々に伝え続けています。

全日本仏教会は仏教精神にもとづき、一人ひとりの「いのち」が尊重される社会を築くため、世界平和の実現に取り組んでまいりました。その一方で私たちはもっと快適に、もっと便利にと欲望を拡大してきました。その利便性の追求の陰には、原子力発電所立地の人々が事故による「いのち」の不安に脅かされながら日々生活を送り、さらには負の遺産となる処理不可能な放射性廃棄物を生み出し、未来に問題を残しているという現実があります。だからこそ、私たちはこのような原発事故による「いのち」と平和な生活が脅かされるような事態をまねいたことを深く反省しなければなりません。

私たち全日本仏教会は「いのち」を脅かす原子力発電への依存を減らし、原子力発電に依らない持続可能なエネルギーによる社会の実現を目指します。誰かの犠牲の上に成り立つ豊かさを願うのではなく、個人の幸福が人類の福祉と調和する道を選ばなければなりません。

そして、私たちはこの問題に一人ひとりが自分の問題として向き合い、自身の生活のあり方を見直す中で、過剰な物質的欲望から脱し、足ることを知り、自然の前で謙虚である生活の実現にむけて最善を尽くし、一人ひとりの「いのち」が守られる社会を築くことを宣言いたします。

2011（平成23）年12月1日 財団法人 全日本仏教会